

児童の「思考力・判断力・表現力」を高める学習指導の在り方 ― 特に、導入場面と終末場面の効果的な指導の工夫を通して ―

大竹 宗
教育方法開発コース

1. テーマ設定の理由

『小学校学習指導要領（平成 29 告示）解説体育編』（以後、『体育編』）では、改善の具体的事項として、「運動の楽しさや喜びを味わうための基礎的・基本的な『知識・技能』、『思考力・判断力・表現力等』、『学びに向かう力・人間性等』の育成を重視する観点から、内容等の改善を図る。また、保健領域との一層の関連を図った内容等について改善を図る。」と示されている¹⁾。その中で、「全ての児童が、楽しく、安心して運動に取り組むことができるようにし、その結果として体力の向上につながる指導等の在り方について改善を図る。その際、特に、運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童への指導等の在り方について配慮する。」と述べられている²⁾。このことは、教師自身が指導者として深い教材研究を行い、主体的に授業改善をしていくことが求められていると考える。

昨年度の研究の結果として、実施した手立てによって児童の「思考力・判断力・表現力」が向上することが児童へのアンケートや授業中の様子やワークシートなどから確認できた。しかし、指導過程における指導方法改善の手立ては、授業実践における展開の場面におけるものが多かった。『小学校学習指導要領（平成 29 告示）解説総則編』では、「児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を、計画的に取り入れるように工夫すること」と述べている³⁾。そして、実際の授業において、総則で指摘している「見通しを立てたり」「学習したことを振り返ったり」する場面は、単元や授業の導入場面や終末場面で行われることが多い。これらのことから、導入場面と終末場面において「見通しを立てたり」「学習したことを振り返ったり」する効果的な手立てを考えていくことが必要であると考えた。

そこで、今年度の研究では、昨年の研究を基盤として、授業の導入場面と終末場面における効果的な手立てを追究していく必要があると考え、本主題を設定した。

2. 基本的な考え方

（1）体育における思考力・判断力・表現力等とは（視点 1）

『体育編』では、「思考力・判断力・表現力等」について、「運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。」と示され、さらに、「自己の運動や健康についての課題を見付け、解決に向けて試行錯誤を重ねながら、思考を深め、よりよく解決する学びの過程である主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進することを通して、体育科の「思考力、判断力、表現力等」を養うことを重視するものである。」と示されている⁴⁾。

（2）授業の導入の場面・まとめの場面とは（視点 1）

授業における導入とは、『新版 教育小辞典』において、「新しい教材単元や経験単元を呈示ないし計画し展開していくに先立って、問答や視聴覚資料の利用によって、この新しい事項を既習の事項の文脈にのせたり、学習の意図・目的あるいは必要性を子どもに意識させ、また、生徒が学習活動を積極的に取組めるように、興味をもたせたりして、学習を動機づけること。」と述べている⁵⁾。また、体育の授業における導入とは、松田岩男及び宇土正彦は、「学習に対する構えをつくって、学習の準備をする段階であり、学習活動を支える基礎的条件を整えること、および学習者の学習意欲を喚起することが基本的に重要である。」と述べている⁶⁾。

終末は、齋藤博伸は、「終末の過程では、学級全体または学習グループごとのめあてを達成したかという視点でまとめをする。このことで、子供一人一人が学びを実感する機会となる。」と述べている⁷⁾。体育科体育授業における終末は、まとめとして紹介されていることが多く、松田岩男及び宇土正彦は、「学習者が、それまでの学習を整理し、目標達成の度合いを確かめ、次の学習に発展するようにまとめる。」と述べている⁸⁾。また、高橋健夫は、「学習者が学習した内容や重要なポイントを再確認したり、問題を発見したり、問題の解決に導いたりする機能をもっている。特に個々の学習者および個々のチームのすぐれた問題解決の方法やすぐれたパフォーマンスを学習集団全体に紹介したり、分析したりして、知識の共有化を図っている。」と述べている⁹⁾。

以上のことから、導入場面で学習に対する動機づけが行われ、教師の教えたいたいものが児童の学びたいものになり、その授業で学んだことが終末場面でまとめられ、次の学習に発展するようにしていくという学びの過程によって授業が成立していることがわかる。したがって、授業において導入場面と終末場面は切り離せない関係であり、導入場面と終末場面は授業改善のためにも重要な学習過程であると考えられる。著者の研究テーマである中でも3つの資質の中で「思考力・判断力・表現力」は、導入場面で自分の課題を考え、学習カードに記述をしたり、終末場面で仲間と活動をふり返ったりする場面において育成されることが多い。したがって、導入場面と終末場面において、児童の「思考力・判断力・表現力」を高めるための学習指導の在り方を研究していくことは重要な試みであると考えられる。

(3) 校内研究との関連について (視点2)

本校では、協働的な学びの充実に焦点を当てて、研究を推進している。校内研究の研究主題は、「子供たちの表現力を高める授業づくり」、副題が「ペア・グループでの学び合いの充実を目指して」としている。4月から「聞き合う関係づくり」に重点をおき、個人の考えをペア・グループ活動で広げていけるように授業を展開することとした。本校で実践している学校全体で児童の表現力を高めようとする取組は、筆者の研究とも親和性があり、研究主任とも相談しながら研究を進めていくこととした。

3. 実践の概要

小学校6年生体育の授業において実践を行った。個人種目では、陸上競技「走り高跳び」の単元を計画して実践し、集団種目では、球技「バスケットボール」の単元を計画して実践した。「思考力・判断力・表現力」を①自分の能力に適した課題を見付けることができるか、②課題解決のための活動方法を選んだり、運動の行い方やルール、作戦等を工夫したりすることができるか、③自分や仲間の考えを言葉や動作で他者に伝えることができるかとして児童に事前・事後のアンケート調査を

実施した。考察は、そのアンケート調査の結果と授業の観察による記録や学習カードへの記述などをもとに行った。

4. 成果と考察

(1) 思考力の高まりについて（視点1）

「思考力」を高める手立てとして、1つ目に単元の導入時、学習カードに単元を通して身に付けたいことや達成したい記録などの目標を記述し、授業の終末時に振り返りを行った。目標と照らし合わせながら本時の授業でできるようになったことを確認することで、自分の課題を変更したり、新たな課題を発見したりすることのできる児童が多かったと考える。学習カードの目標達成度も90%以上となり、充実した授業にすることのできた児童が多くいた。

2つ目に、児童の目標や課題を学習カードなどから理解して児童の考えた課題を称賛し、肯定的なフィードバックを心がけた。授業中に声をかけることができなかつた児童に対しては、学習カードに肯定的な記述を行うことで児童一人一人が自分の取組に対して自信をもって授業に臨むことができるようになった。学習カードへの課題の記述は、初め友達と合わせて自己の能力に合わない課題となってしまうていた児童も、授業が進むにつれて自分の目標や自己の能力にあった課題と変化した。このことから、授業の導入時や終末時に行われる教師の肯定的なフィードバックは、児童の「思考力」を高めることにつながると考えた。

3つ目に終末時に行うグループでの振り返りによって、自分とは違う考えをもつ他者と関わることで自己の能力に適した課題を発見することができた児童がいた。自分の考えを記述したり、全体の前だと話をすることが苦手であったりする児童にとって、グループでの交流は考えが出しやすく、考えが浮かばない場合であっても交流を通して、次第に自分の考えがまとまるようになった。

(2) 判断力の高まりについて（視点1）

「判断力」を高める手立てとして、1つ目に、学習資料の工夫を行った。掲示資料だけではなく、自分の動きと見比べられるような視聴覚教材を準備した。児童の実態に合わせて様々な学習資料を準備することで、児童は自分から進んで活動場所や用具を準備するようになり、活動時間を増やすことにもつながった。

2つ目に、ペアやグループでの話し合い活動を取り入れた。本時のめあてから自分やチームの課題解決に適した練習方法を短時間であってもペアやグループで話し合うことによって練習することが明確になり、運動の得意、不得意に関わらず、全ての児童が自己の能力に適した課題を解決するために運動の方法を考えられるようになった。また、個人種目においてはグループを固定せず、たくさんの仲間と交流することによって自分が考えつかなかつた練習方法に取り組む児童がいることに気が付くことができ、単元が進むにつれて様々な活動をする児童が増えていった。終末の振り返りにおいては、自分の取り組んだことを仲間へ伝え、練習方法等を一緒に考えることによって考えが深まり、次時の学習に発展させることのできる児童もでた。このことから、ペアやグループ活動を通して仲間と交流することは、判断力を高めるために大切であると考えた。

(3) 表現力の高まりについて（視点1）

「表現力」を高める手立てとして、1つ目に、授業の振り返りを充実させた。個人の振り返りは学習カードによって蓄積を行い、単元を通して自分の考えや取組がどのように変化したのかを見え

るようにしたり，学習課題とつながりがもてるように記述のさせ方を工夫したりした。単元が進むにつれて課題に対しての振り返りができるようになり，記述内容も十分満足できると評価できる児童も増えていった。ペアやグループでの振り返りは，表現をする機会が多くなり，自分や仲間の考えを他者に伝えることで，「表現力」を高めることができていた。様々な仲間と交流することで新たな見方や考え方にふれることができ，「表現力」が高まることにつながった。全体での振り返りでは，グループで出た仲間の考えを取り入れることを意識させて発表させることで，「表現力」が高まったと考える。

2つ目に，1人1台端末の活用である。体育の「表現力」の中には動作で表すということがある。運動中に自分の動きを客観的に見ることができないため，自分の動きを知ることは，自分の動きを言語化や文章化することにつながり，「表現力」を高めるために有用であると考ええる。

(4) 校内研究との関連（視点2）

社会科や国語科においてもペア・グループ学習を取り入れ，学び合いを進めてきたことで，児童には聞き合う関係ができた。この関係ができたことで，体育の授業においても仲間と進んで交流して自分の考えを言葉に出して交流したり，仲間の考えから新たな考えを発見したりすることができ，児童の「思考力・判断力・表現力」を高めることにつながった。

5. 今後の課題

体育の授業では，自分で考えたことや仲間から伝えられた練習方法や運動の仕方を実際に自分で行ってみることで表現ができることが増えたり，新たな課題に気が付いたりすることができたりする。つまり，試す時間と思考する（試行錯誤する）時間が必要となる。活動時間しっかりと確保できるようにしたい。また，「思考力・判断力・表現力」の見取り方は，授業中に1つのグループや1人の児童について見取り続けることは，安全の確保や全体の進行を確認するためにも難しいため，授業の導入場面，終末場面で集まった際や学習カードの記述内容などで「思考力」の深まりを見取ることとなる。単元を貫いた問いを考えたり，単元を通して児童の「思考力・判断力・表現力」を評価できる単元計画を考えたりできるようにしたい。

-
- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 体育編』（東洋館出版社），p.7.
 - 2) 同書 p.7.
 - 3) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』（東洋館出版社），p.87.
 - 4) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 体育編』（東洋館出版社），pp.17-23.
 - 5) 下程勇吉.1980.『新版 教育学小辞典』（法律文化社），p.280.
 - 6) 松田岩男，宇土正彦.1981.『新版・現代学校体育大辞典』（大修館書店），p.64.
 - 7) 齋藤博伸.2025.「単元・授業づくりと資質・能力の育成」『教育セミナー研究紀要』28巻，p.31.
 - 8) 松田岩男，宇土正彦.1981.『新版・現代学校体育大辞典』（大修館書店），p.17.
 - 9) 高橋健夫.2008.「よい体育授業実践はよい体育授業のイメージから」『体育科教育』（大修館書店），pp.18-21.